

コリント人への手紙3章11-13節 「キリストによる報い」

1A イエス・キリストの土台 11

1B 信仰告白

2B 十字架につけられたキリスト

2A 家の材料 12

1B 人のものさし

1C 人に良く見える善行

2C 天の父の報い

2B 自分の義

1C 肉による完成

2C 高ぶり

3B キリストの愛

1C 多く赦された者

2C 神の恵み

3A 火による裁き 13

1B 隠れたこと

2B 試練と吟味

4A 称賛という報い

1B 栄光の姿

2B 御国の相続

本文

コリント人への手紙第一 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 3 章に入ります。午後に一節ずつ見ていきますが、午前は 11-13 節に注目します。「11 **だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものを試すからです。」**

まるで、三匹の子豚のおとぎ話のような話ですね。三匹の子豚が家を造りますが、それぞれ、藁、木の枝、そして煉瓦で家を造ります。藁の家は、狼に吹き飛ばされてしまい、木の枝も同じです。けれども、煉瓦はそうはいかない。煙突から入ろうとしたら、下の暖炉に煮えたぎった水があって、それで狼が死んでしまう、という話です。ここでは、「その日」と呼ばれている、火による裁きがあります。同じように家を建てるけれども、どの材質によって建てるかで、燃えつくされるか、むしろ精

鍊されて耐久するかのどちらかになります。

私たちはこれまで、コリントの人たちが、パウロにつくとか、アポロにつくとか言って、党派心をむき出しにしている問題があることを見してきました。その背後には、パウロが教会をコリントで建て上げた後に、パウロが使徒であることを否定的に語りながら、自分の語っていることに人々を集めようとする、自称教師たちがいたという背景があります。今の文化で分かりやすくいうなら、インフルエンサーとフォロアーというところでしょうか。インフルエンサーの中には、敢えてすでに認められている人々をこき下ろすことによって、自説をぶちまけ、それで人々が集まって来るという現象が起こっていますね。コリントの文化では、ソフィストという知者と呼ばれる人々に自分が付いていて、自分の教師を擁護し、他の教師をけなすようなことをやっていました。

けれども、教会でそれを行っているのがコリントの人たちだったのです。それで、今、パウロはしているのは、教会を建物にたとえていることです。そして自分は、イエス・キリストという土台を据えたけれども、その後に教師たちが来て建て上げているものがある。または、コリント人たちが率先して自分たちで建て上げているものがある。けれども、果たしてそれが実質の伴ったものなのだろうか？永遠に残るものなのだろうか？本物の神の建物なのだろうか？と問いかけているのです。私たちがしていることで、主のゆえにしていることは永遠に続きます。けれども、そうでないものは一時的で過ぎ去ってしまいます。その区別について、今日は学んでいきます。

1A イエス・キリストの土台 11

パウロは 11 節で、「**だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。**」と言っています。パウロは、キリストのみを宣べ伝えることによって、その他のことは語らないようにしていました。人間の知恵によるのではなく、御霊と御力の現れであるようにしました。このように、注意深く、イエス・キリストご自身が教会の土台になるようにしました。

10 節で自分のことを、「**賢い建築家のように土台を据えました。**」と言っています。賢いのは、何をもって賢いのか？と言いますと、他の人がこの土台をだれでも使って、その上に建物が立てられるようにするためです。イエス・キリストという土台に、信仰が建て上げられ、教会が建て上げられるようにするためです。コロサイ人にパウロは、「2:7 **キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。**」と教えました。

1B 信仰告白

イエス様ご自身が、教会について語られた時に建物のようにして語っておられました。弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと思っていますか？」と尋ねられたところ、ペテロが、「あなたは生ける神の子キリストです。」と告白しました(マタイ 16:16)。そしてイエス様は、「わたしは、こ

の岩の上に、わたしの教会を建てます。」と言われたのです(16:18)。イエスが神の子キリストであるという信仰告白の上に、イエスご自身がご自身の教会を建てられます。

2B 十字架につけられたキリスト

そこで、パウロは注意して、十字架につけられたキリストを宣べ伝えました。2章にて、そこにこそ神の知恵があり、奥義のうちにある神の知恵があること述べていました。十字架にある奥義って何なのかな？と私も思い巡らしました。

そこでローマ人への手紙を思い出したのです。コリントの学びをする前はローマ人への手紙でした。そこで、十字架に付けられたキリストの働きによって、私たちが神の前で義と認められました。神の御怒りから救われています。けれども、それだけでなく、罪と死の力から私たちを解放し、義といのちの支配が恵みによって与えられていることも論じていました。ですから、ただ地獄から救われること、大患難から救われることが救いではなく、実質的に罪の力から救われていることも、十字架の奥義にあるのです。さらにパウロは、私たちが神の子どもになったことを述べました。神の子どもになるとは、神の似姿に回復することです。神の養子縁組に入ることです。神の栄光を反映することです。神の似姿に、栄光の姿にまで回復するのが救いです。

私たちが敬虔に生きていくのに、どれほどキリストを掘り下げないといけないでしょうか。この方にこそ、私たちの敬虔がかかっていますね。この方が成し遂げてくださったこと、神の恵みにこそ、私たちが正しく生きる力と糧があります。

2A 家の材料 12

このように、キリストを土台にして建て上げられないといけないのですが、10節には、「しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。」と述べています。そこで、「12 **だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、13a それぞれの働きは明らかになります。**」と述べています。金や銀、宝石であれば、永続性があります。けれども、木や草、藁であれば見かけだけであり、すぐに燃やし尽くされます。

1B 人のものさし

土台がキリストであるからこそそのキリスト教会であります。見かけはそうであっても、実質が違うということがあります。表向きの装いは、とても熱心で、敬虔に見えて、すごいと思わせるものです。活発に見えるでしょう。けれども、中身がまるで違うことがあります。パフォーマンスだけ、ということがあります。その大きな動機の一つが、「人にどう見られているか」ということです。

1C 人に良く見える善行

イエス様が言われました。「マタ 6:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけな

い。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。」当時、パリサイ人や律法学者は、自分たちの行いが人に見えるようにして、それでいかに神を畏れ、愛しているか印象付ける動機がありました。けれども、イエス様は強烈なことを言われます。「あなたは、すばらしい人ですね。」という称賛を受けたら、その誉め言葉だけが報いであり、天には報いは残されていない、ということなのです。天における報いは永遠のものですが、人に褒められてちょっと気分が良くなったというだけが報いとは、実に空しいです。

もし私たちキリスト者の生活が、他の人たち相手のためだとしたら、とても疲れるものとなるでしょう。心の葛藤は深くなるでしょう。ある人がこのようにパフォーマンスを説明しました。「根本的に、心の中に、恐れや不安、満たされない思いがあるので、愛や承認を「行い」によってその隙間を埋めようとします。その行いをパフォーマンスと言います。しかし、本質的な心の隙間が満たされない限り、パフォーマンスは止まりません。」¹これをやると、良いクリスチャンを演じなければいけません。しばしば、イエス様は彼らのことを偽善者と呼ばれましたが、元々の意味は演技から来ています。仮面を着けて、別人を演じているのです。

2C 天の父の報い

これは何も、人前で善行をしてはいけない、ということではありません。イエス様が、「マタ 6:4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」ここでイエス様が言われているのは、隠れて行いなさいということではありません。そのような解釈は未だ、パフォーマンスに基づいた考えです。

そうではなく、父なる神が報いてくださる、という、人相手ではなく、神相手で行いなさいということなのです。行いではなく、愛する父に見てもらおうという関係です。自分を認めてくださる方はただ父なる神なのだ。この方を喜ばせることだけでよいのだ、と分かれば、私たちはとても安心します。天の父は私たちを子どもにしてくださった方です。愛してやまない方です。その方をただ喜ばすだけでよいのです。

2B 自分の義

人からどう見られるか？という動機は、木や藁や草ですが、自分の義を立てることも、木や藁や草であります。パウロは、ローマ 10 章で、熱心なユダヤ人たちを「彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。」と言いました(2 節)。

1C 肉による完成

しばしば、このような理解がクリスチャンの間でされます。どうしても、私たちは自分に自信がないので、こうした教えには、騙されやすいです。「あなたは、信仰によって救われました。けれども、

¹ <https://www.biblelifecoach.net/sermon-on-the-mount19/>

天において報われるためには、行いによる努力が必要です。」そんなことを言いながら、ピリピ 2 章 12 節を開いて、「恐れおののいて自分の救いを達成しなさい。」などと言います。そこで、自分が神から報いを受けられるかどうか？ということ、自分の頑張り、あるいは頑張りのなさによって推し量ろうとします。

パウロは、このように、信仰による、神の恵みによる救いと、良い行いを分ける考え方がいかに間違っているかを、次のように述べました。「ガラ 3:3 御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。」信仰によって御霊を受けました。であるならば、その後も信仰によって進み、御霊に導かれたいけないと言っています。

肉による完成で思い出すのは、アブラハムがイシュマエルを生んだ時のことです。彼から子孫が出て、大きな国民となる約束であったのに、一向に子供が与えられません。そこで妻のサラが、自分の女奴隷ハガルによって子が与えられるように願いました。アブラハムはハガルからイシュマエルを得たのですが、しかし彼が大人になる 13 歳の時に、神はきっぱりと、「いや、サラから出るのが、あなたの子になる。」と言われたのです。そして、イサクが生まれ、乳離れの祝いの時に、イシュマエルとハガルは家から追い出されました。それから、イサクが大きくなり、神は試練をアブラハムに与えられました。イサクを全焼のいけにえとして献げるように命じられたのです。その時に、神は、「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。(創世 22:2)」アブラハムに対して、神はイサクがひとり子であると言われて、イシュマエルのことは無いにも等しいとみなされていました。もちろん、彼には彼に対する祝福を神は宣言されましたが、しかし、神の前に肉の努力は全く無であるかのように、みなされるのです。

つまり、私たちが神の前に出る時に、自分の肉による頑張りは目に留められることはないのです。自分の肉で完成させようとしていたところは、すべて神の前では削がれていくのです。

2C 高ぶり

結局、肉によって完成させようとする試みは、高ぶりしか生みません。自分のしたことこそが、神に認められるとしているのですから、自分がこれだけのことを行ったのだとして、自分への誇りが残るだけであり、神のすばらしさを見上げることはないのです。パリサイ人の宮における祈りと、取税人の祈りがありましたね。パリサイ人は、自分がいかに十分の一を献げているかなど、自分のしてきたことをただ誇っているだけのことでした。

一見、良さそうに見える教会の姿、キリスト者の姿。つまり、良い、模範的なキリスト者になろうとする努力。その裏には、自分が人にどう思われているのかという不安に駆り立てられたものになっていたり、また、自分の努力こそが神からの報いを受けると思っていたりしています。そして、それが難しいから、自分はいい加減なクリスチャンのままでいいのだと、あきらめてみたりします。けれ

ども、どちらも間違っているのです。そもそも、模範的なクリスチャンを理想と掲げたり、自分の努力目標をそこに掲げたりしているのが、間違っているのです。キリストが戻って来られて、その御前に出る時に、むしろ、その肉の努力こそが燃やし尽くされてしまうものなのです。

3B キリストの愛

では、私たちがキリストの上にどのように建てていくのか？パウロが、こう話しています。「キリストの愛が私たちを駆り立てているのです。」(Ⅱコリ 5:14 別訳参照)良い人でいよう、良いクリスチャンになろうという、人にどう思われるか不安や恐れに駆り立てられるのではなく、キリストの愛に駆り立てられている時に、そこには永遠に残る報いがあるのです。

1C 多く赦された者

イエス様が、パリサイ人シモンの家におられた時のことです。不道德の女が、イエス様の足もと涙を流し、それを髪の毛でぬぐい、足に口付けしました。シモンは、彼女が不道德な女であることを、預言者であれば知っているはずだと心で思っていました。それでイエス様は、喩えを話されました。金貸しから 500 デナリと 50 デナリ借りた人がいて、どちらも帳消しにしてもらったけれども、どちらが金貸しをもっと愛するか？という質問ですが、シモンは、多くを帳消しにもらったほうです、と答えました。

すると、イエス様は、見方を変えました。シモンの家にイエス様は客として来られました。けれども、ずいぶんと失礼な、冷たい待遇を受けました。足洗いをしてもらえなかったのです。当時は、客を敬うのであれば、そうするはずですが、けれども女は、これでもかというばかりに、イエス様への敬意を、涙で足をぬぐい、口づけをしたのです。そこで言われました。「ルカ 7:47 ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」

実は、自分が問題だと思っていることが、神にとっては全く問題がないことで、自分が問題ないと思っていることが、実は神の前でかなりの問題だと思っておられることがあります。それが、「どれだけ赦されたか？」ということなのです。「ああ、分かっていますよ。私は多くの罪がありますから、赦されていますよ。」と言われるかもしれません。いや、実際は、自分がどれほど愛され、赦されているのか、それほど受け入れていないということがあるのです。これだけのことは神から赦されているかもしれないけれども、他の部分は神に愛されるように自分を正していけないといけない。」というように考えてしまっています。無条件の神の愛を、自ら条件付きにしているのです。こんな自分は神とて、どうしても愛せないだろう。だから、良い子でいよう、愛されるために。」となるのです。

いいえ、その多くを赦されているということ、ありのままの自分を神にさらけ出すことによって、一杯受けている必要があるのです。それによって、初めて、心が神への感謝でいっぱいになって、

神に自分のすべてを献げたい、神を心から愛したいと願うようになります。そして、そうやって愛されたから愛するという中で行っている良い行いこそが、神が得たいと思っておられる実であり、とこしえまでも残る実なのです。

2C 神の恵み

神によって示された、一方的な好意、恵みこそが、私たちに多くの働きをさせます。「Ⅰコリ 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」

神の教会を迫害したという負い目をパウロは持っています。それにも拘らず、神は一方的に彼を、異邦人に福音を宣べ伝える使徒として召されました。そこに大いなる神の恵みを彼は覚えます。その畏れ多き神の取り扱いに、彼は圧倒されつつ、気づいてみると、他の使徒たちよりも多くの働きを行っていたのです。けれども、それは自分ではない、神の恵みなのだということがわかります。一方的に神が行われたことなのだ、わたしではなく、キリストなのだ、と、心から思っていたのです。そのような、神の恵みによる働きこそが、金や銀のように最後まで残る家なのです。

3A 火による裁き 13

そしてパウロは 13 節で、こう言っています。「**「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。**」その日が鍵括弧弧になっていますが、それは何でしょうか？読み進めると、4 章 5 節でパウロがこう言っています。「ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称赞が与えられるのです。」主が来られることです。主が教会のために戻って来られることです。主は、そこにおいて、火によって不純物を精錬し、真価が試された部分において、報いを与えられるのです。こうも言っています。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」私たちはみな、キリストのさばきの座の前に現れます。

1B 隠れたこと

4 章 5 節で言っている、「闇に隠れたこと」とは何でしょうか？あからさまな罪、ただ人に知られていない罪もそうですが、それ以上に、「心の中のはかりごと」であります。人からどう判断されるか、私は気にしないと 4 章 3 節で言っています。つまり、人からどう思われるのかというような基準で行ってきたこと、行っていることは見た目は同じでも心の動機が間違っていたら、そういったことをイエス様はご自分が戻って来られた時に明らかにされるのです。

私たちは、目に見えることは本当に限られています。悪いことについても、良いことについても、知られていることはわずかです。パウロは、テモテ第一でこう言いました。「5:24-25 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。同じように、良い行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままでいることはありません。」私たちは、隠れたことが明るみに出されるとなると、怖いことかもしれないと思われるかもしれません。けれども、むしろ、ここに安息できるのです。自分が主にあって行っていることが、人に見られているようなものでなくとも、父が見ておられる、このことを、キリストが来られた時に明らかにされるのだ、ということです。むしろ、自分もうすうす、フェイクだと分かっている部分については、きちんと火によって清めてくださいます。不純物は取り除いて、精錬してくださるのです。

2B 試練と吟味

私たちは、主が来られる日まで、この裁きを待つ必要はありません。むしろ、主の来られる日を思いつつ、今からでもできることがあります。それは吟味することです。「11:31 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」自分自身を、神の目で見ていく時間が必要です。そして、有体に自分を見ていくことができれば、フェイクの自分とリアルの自分の乖離は少なくなります。キリストが来られる時も、心は安心できるのです。

そして、神ご自身が信仰の真価を試される時がありますね。それは試練です。「I ペテ 1:7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称赞と栄光と誉れをもたらします。」まさに、ここに金が火によって精錬されることが書かれています。試練がないと、私たちは自分の信仰がどれほどのものか分かりません。試練によって、信仰を働かせます。それによって、はっきりと分かります。そして主により頼まないといけなことを知るのです。その真価によって、主が来られる時に称赞と栄光と誉れをもたらす、とあるのです。

4A 称赞という報い

そうです、キリストの裁きの御座というのは、罰せられるところではないのです。それはキリストの十字架によって既に済んでいることなのです。だれでもキリスト・イエスのうちにある者は、罪に定められることは決してないのです。では、何が裁かれるのか？イエス様は、私たちに報いたい、褒美をあげたいと願われていて、ご自分の愛によって突き動かされた私たちに、報いを与えようとされているのです。

1B 栄光の姿

そのためには、不純物が清められないといけません。主の前に出る時に、傷のない者、汚れのない者として出ることが、一貫して、主の再臨の時の私たちの姿として描かれています。そのために、まず火による裁きがあります。火というと燃やし尽くすというイメージが付きまといますが、いい

え、御霊によって水のように罪が洗い清められましたが、火によって清めることもありますね。それが、金銀を精錬する時です。このことを経て、私たちは栄光の姿に変えられます。

2B 御国の相続

そして、神の子どもの姿に変えられた私たちに、イエス様は、多くのものをお任せになります。ご自分の御国を立てられる時に、任せられるのです。「マタ 25:23 よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」これが、イエス様の心です。報いといっても、喜びの中での褒美としての報いなのです。えっ、自分がそんなに喜ばれることやっていないけれども？と、その時に思われるかもしれません。それこそが、恵みによる働きなのです。自分でやったという意識がないのです。罪が赦された、神に愛されている、父なる神が見ておられるという中で行っていることなのです。これが、恵みから恵みへ、恵みの上に恵みという、神のなされることです。

1コリント4章 隠れたことが明るみになる

罪も、また良い行いも、明らかにされる

マタイ6章 人前での善行 父なる神からの報い

Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

試練は、さばかれる前から真価が試されている時。1ペテロ1章

自分を吟味することで、さばかれることはない。1コリント11章

信者がさばかれるとしても、懲らしめであって、世と共に裁かれないようにするため。

The ways of destroying the church are many and colorful. Raw factionalism will do it. Rank heresy will do it. Taking your eyes off the cross and letting other, more peripheral matters dominate the agenda will do it—admittedly more slowly than frank heresy, but just as effectively on the long haul. Building the church with superficial “conversions” and wonderful programs that rarely bring people into a deepening knowledge of the living God will do it. Entertaining people to death but never fostering the beauty of holiness or the centrality of self-crucifying love will build an assembly of religious people, but it will destroy the church of the living God. Gossip, prayerlessness, bitterness, sustained biblical illiteracy, self-promotion, materialism—all of these things, and many more, can destroy a church. And to do so is dangerous: “If anyone destroys God’s temple, God will destroy him; for God’s temple is sacred, and you are that temple” (1 Cor. 3:17). It is a fearful thing to fall into the hands of the living God.

These kinds of truths the factionalists of Corinth ignored. And these truths are all too frequently ignored by their modern counterparts. This calls for thoughtful self-examination and quiet repentance.²

² Carson, D. A. (2004). [*The Cross and Christian Ministry: Leadership Lessons from 1 Corinthians*](#) (pp. 83–84). Grand Rapids, MI: Baker Books.